2024年12月1日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

クリスマスの賭け

［マタイによる福音書1章18～21節］

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

[1]　 「信仰のいのち」とは何？

皆さんはクリスチャンになって良かったと思いますか？え？牧師さん、日曜日の説教の中で何を言うの？と思うでしょうか。私自身は、もちろん良かったと思っています。ただ、その「良さ」というのが、段々と、或いはこのコロナの時期を迎えてからは急激にと言っても良いかもしれませんが、変わって来たなと思っています。昔は、私は「教会」という所は楽しい居場所のような所だと思っていました。今もそれは否定しません。そしてそうであれば良いなぁと思います。ただ、そういう時は人がたくさん集まっていました。若い人たちも多かった。和気あいあいとした空気が常にあったと思います。ですから単純にそこに身を置けば良かったのです。居心地の良さに包まれ、クリスチャン生活は何と楽しいことだろうと思っていました。しかし、時代は変わりました。世界中そうですが特に日本は急速に高齢化が進みました。またインターネットの普及で、私たちの時間はとても短くなってしまったと思います。まるで一日が12時間位に思え、瞬く間に過ぎて行く。人間同士もわざわざ会わなくても色々なコミュニケーションツール（メール、LINE、ZOOMなど）で、変な言い方ですが、お風呂に入りながらだってやり取りができる。そして追い打ちをかけたのがコロナです。接触禁止。集会を控えることが当たり前の空気になりました。一応、ひどかったコロナ騒動は収まったと言えるかもしれませんが、それ以前とその後は、私は「教会」と私たちの信仰は大きなチャレンジを受けていると思います。

この時代、「昔は良かった」は通用しないと思うのです。若い人が増えないと教会の未来はないと思い、私たちは不安に思います。しかし、もしも若い人たちが増えたとしても、この変化の激しい時代にノスタルジックな光景を夢見ても、若い人達は困惑してしまうでしょう。じゃあ、どうすればよい？私も分からないので困っています。ただこうやって今日も皆さんと神様を仰ぎ、礼拝を捧げることが出来てる。これは、当たり前のことではないと思います。そのことによって、もちろん神様は、今週もここに帰って来たねと喜ばれていると思いますし、私自身痛感していますが、集会に参加することで、私たちはここに集う人たちの信仰を励まし、支えているのです。一体、私たちにとって「信仰のいのち」というのは何なのでしょうか？今それを突きつけられているように思えてなりません。

[2]　簡単ではない「信じる」ということ

さて、いよいよクリスマスを迎える月に入りました。イエス・キリストのご降誕を迎えようとしています。私たちはクリスマスを楽しみにしていますね。それこそ、クリスチャンになれて良かった、と強く思う時期かもしれませんね。しかし、今日の聖書の記事を読んでみると、ここには何のキラキラしたものも、またノスタルジックな情緒も全くないと言って良いと思います。マリアと婚約者ヨセフ。この若い二人にとって、神様がされたことは、これからの夢を打ち壊すようなことでした。

突然に胎の中に子どもを宿すことになったマリアの驚きと戸惑い。こんなことが起こるとは、と思ったことでしょう。ルカによる福音書にはマリアが神様を讃美して歌ったという讃歌（ルカ1章）が載っていますが、それとて、いきなり口を突いてきたわけではないでしょう。「信じられない」と悩んだはずです。それはヨセフも同じでした。きっとマリアから、み使いが来て、私にこう告げて、幼な子を宿したのですと聞いたのでしょう。ヨセフはそれこそ信じられなかったと思います。しかし事実、マリアは子どもを宿している。まだ結婚前。自分の子ではないことだけは良く分かります。マリアにとっても、ヨセフにとっても、彼らはいきなり人生最大の危機に立たされたのだと思います。そしてこの苦しみをもたらしたのは、他ならぬ神様です。クリスマスは、この二人の、葛藤・苦しみから始まったと言っても良いかと思います。そして私はある意味、聖書が告げるクリスマスが、人間の葛藤や苦しみ、或いは不信の思いを抱え込んで始まっているのだということに驚きと、慰めとを感じます。

ちょっと話は変わるのですが、私は一昨日何気なしにラジオを付けていたら、懐かしいカーペンターズの曲が流れていました。とても美しいメロディで、それこそノスタルジックな気持ちになってしまったのですが、曲は『青春の輝き』というものです。歌を歌っているカレン・カーペンターさんは、拒食症にもなり、痩せ薬の影響もあって32才の若さで亡くなってしまいましたけれども、この曲はカレンさんが自分たちの歌でとても愛していた歌だと言っていたということです。ではどんな内容なのかなと思って調べてみましたら、これが“信じられない苦しみ”というのを歌っている曲だったのです。驚きました。『青春の輝き』というタイトルとは裏腹のようにも思います。原題は、『I Need to be in Love』で、これは折り返しの言葉なんですね。どんな歌詞かというと、***「わたしに人生で一番難しいことは、信じ続けること。この狂った世界のどこかに私を愛してくれる人がきっといると。儚い人生を人は行き過ぎるばかりで、私にチャンスがやって来ても気付かずにいるかもしれない。（中略）そう、私には愛すること、愛が必要なんだ。そう、私は時間を無駄にし過ぎた。私は不完全なこの世界に、完璧を求めていて、そして愚かにも、それが見つかると思っていた。」***

歌の歌詞を書いたのは別の人ですが、カレンさんは自分のための歌だと思っていたようです。彼女も、人生の苦しみを経験していた人でした。この歌でも歌われているように「信じる」ということは、簡単なことではないのではないでしょうか？「信仰」の世界に当てはめて考えてみても、私は、葛藤のない信仰はないと思います。意外と教会生活を続けていくと、忘れがちになってしまうのが、なかなか信仰に入り込めない人の気持ちです。ある意味「信じる」ということは恐いことです。私自身も思い出しました。求道をしてすぐに信じられた訳ではありませんでした。「信じたいが、信じたら自分がなくなってしまうのではないか」と思っていました。では、なぜ私が信じることが出来たのか。理屈じゃないのです。パスカル（17世紀の哲学者）は、「信仰とは賭け」だと『パンセ（瞑想録）』の中で語りました。「賭け」とは「決断」ということです。あのペトロがイエス様の招きに「お言葉ですから網を降ろしてみましょう」と言ったのと同じです。

[3] クリスマス―神様の熱情の出来事

　最近、こんな言葉を聞きました。「『信じる』とは、頭（脳）で信じることではない、体（腹）で信じることだ」と。“おなかで信じる”と言いますか。私たち、主を信じる時に、スッと信じられた方もあると思いますが（それは素晴らしいことです！）、それでも自分の頭の中で良く理解して十分に分ったから信じたのではないと思います。全て納得したからというよりも、頭の中には「？（クエスチョンマーク）」があるけれども、ある時これを「受け止めてみよう」と、「賭け」をし、踏み出したのではないでしょうか。傍観的に眺めるのではなく、「食べた」のではないでしょうか。

この「腹で信じる」ということを、マリアもヨセフもしたのだと思います。先ほども語りましたように、二人にとってこの時のみ使いの告知は、驚天動地のことであり、受け止めきれないこと、人生最大の危機の出来事でした。しかし、神様は、そのように、自分の人生が振り回されるような時に、いや、時にこそ、聖霊のわざをなして下さるのだと思います。聖霊。マタイ福音書1:18にはこうありました。「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった」。ヨセフは、マリアが罰を受けなくて済むよう、自分が責任を被って婚約を破棄しようとしますが、ヨセフは夢の中で、み使いのメッセージを聞きます。20節。「ヨセフ、恐れずに妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は、聖霊によって宿ったのである」。私たちに一歩踏み出す行動を促すのは「聖霊」なのです。私の‟外から”来る力です。そして、だからこそ安心なんです。聖霊は私たちを悪いようにはなさいません。私たちを孤独にしない霊なのですから。

そして思います。「腹で信じる」と言いましたが、「腹をくくる」と言っても良いでしょう。覚悟を決めるということ。このクリスマスの発端の物語で、誰よりも腹をくくって下さったのは、神様だと思います。神様は、2千年前に、私たち人間のために、覚悟を決めたのだと思います。1:21「その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」。―神様は‟わが独り子を、十字架にかけるために送ろう”と、マリアとヨセフを通して、裸の子どもを、私たちに与えて下さったのです。これは、神様の人間に対する「賭け」です。神様は人間を信じて、マリアとヨセフに幼な子を託しました。それは私たち人間に対する信頼であり、途方もない愛ではないでしょうか。もしリスクを頭で考えたら、そんなことは出来ません。そう、私たちは神様に愛されているのです！不完全なこの世界の中で、完全な愛を見つけることが出来るのです。何と感謝なことでしょうか。

私たち、いや私は、もしかしたら甘えていたかもしれないと思いました。教会が楽しいということは素晴らしいことだと思います。しかし、教会の形は新しい時代の中で変化していくと思います。「昔は良かった」ではなく、今、私個人としてどう神様に向かい合って行くのか、それが問われているのだなと思いました。マリアとヨセフはこれからの人生、聖霊に捉えられ、神様に支配されることを選び取ったと言えるでしょう。クリスマスは、私たちに関わろうとする神様の熱情の出来事です。クリスマスの出来事。この後ご一緒に与る「主の晩餐」のように、頭というより、体で受け取りましょう。お祈り致します。

愛する主よ、あなたは私たちを見出して下さり、御子イエスによって、今日も招いていて下さいます。私たちの人生の危機の時にこそ、あなたの御業は進むことを教えられました。どうか、全くあなたに預けて生きる幸いの中へと導いて下さい。特に病を得ている者、弱さ抱えている者を守り、支えて下さい。このクリスマスの時期、私たちもう一度あなたとの関係を結び直して前に進むことが出来ますよう聖霊を注いで下さい。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。